



相変わらずの湿った空気に囲まれながら、トーヤは最後の薪まきを乾燥釜に押し込むと、今度は火をつける準備を始める。

トーヤ達が住む創世の森は常に霧雨きりさめが降っているため、薪は乾燥させるために作った部屋で乾燥させなければ使い物にならない。

もちろん魔法で乾燥させることもできるけれど……。

『昔からそうしてるんだから、別にいいじゃない』

とは、師匠の談。

この乾燥釜も師匠が小さい身長ながら作った、年季の入ったものだ。それをトーヤがだましまし使っている。

「いい加減建て替えないとダメかなあ……」

トーヤはそんなことを思いながらも、釜に火をともした。

火をともしるときも、特に魔法は使わない。

トーヤはそれが面倒で仕方がなかった。

「よしっと」

パチパチと薪に火が燃え移ったことを確認すると、トーヤはポンポンと両手を払った。

うっすらと煙が煙突へと抜け、それはもくもくと森へと広がっていく。ここでは薪だけでなく、薬草などを乾燥させることもできるため、煙の臭いは少し独特だ。

「えっと、次は……と」

と、トーヤが次にすべきことに移ろうと振り向いたときだった。

「わぶ！」

トーヤの顔面が何かにぶつかった。

「おっと、すまない」

そしてトーヤの上の方から、落ち着いた声が降ってくる。

芯があって、頼りがいのあるしっかりとした声だ。

そして良く通る声でもあった。

「え……？」

こんなところに、人？

トーヤはびっくりして首をあげた。

「こんなところに人がいるなんて、驚いたよ」

そこには精悍せいこんで美男せいかんという言葉がふさわしい長身の男が立っていた。金髪をわずかな風になびかせながら、トーヤを見つめて笑顔を送っている。

霧雨で濡れた髪から、雫しずくが落ちるその様は、まさに水もしたたるイイ男であった。

その風貌ふうぼうは決して豪華ごうかではないが、しっかりと鎧よろいを着込み、腰には剣が二振り。

マントはしていないが、肩のマント止めにはノーザンブルグの紋章があしらわれていた。

「確か、魔法使いの家はこの辺だったと思うのだけど、キミ、解るかな？」

男はその整った笑顔を手向けながら、トーヤに尋ねた。

トーヤは不審に満ちた目で、男を見上げる。

ここは創世の森。

しかも魔法使いが住んでいると言われる、森の中でも深い場所。ここには魔法使いが施した惑わしの術を抜けてこなければ、来られない。

つまりここで人に会うことなど、あつてはならないのだ。

「ははは、キミが不審がるのもよく解るよ。けれど、そういう態度をとるということは、この森の事情を知っていると言うことを喋ってるようなものだよ」

「あ！」

「もしかして、魔法使いは弟子を取ったのかな？」

「あー……うー……」

「大丈夫だよ、怪しい者じゃない。私は魔法使いの知り合いなんだ」

と、男はさらににこやかな笑顔で、右手を差し出した。

「メデイト、メデイト・パス・ウィルスだ、キミは？」

そして半ば強引にトーヤの手を取り、握手してくる。

「ト、トーヤ……」

トーヤは男のその雰囲気を押され、小さく名前を返した。

「トーヤ君、でいいかな？」

「は、はい……」

なんだか馴れ馴れしいな、などと思いつつ、トーヤは魔法使いが住む木の虚うつろの方をなんとなく見やった。

そこは何十もの蔦つたに覆おおわれており、一見、虚があるようには見えない。トーヤはこのメイドという男が果たして信頼に足るのかどうかを知りたくて、もしかしたら師匠がこっちを見ていることを期待したのだが……そこにはしっかりと閉ざされた蔦があるだけだった。

「案内、してくれるかな？」

メイドの爽さわやかな笑顔。

トーヤは観念すると、メイドの言うことに従った。

* * *

「先生、お客さんですよ」

一人一人通るのもやっとな廊下から居間にトーヤとそしてメイドが入ってくる。トーヤが驚いたのが、メイドの身体裁さばきだ。この魔法使いの住処すまかは基本的に魔法使いの身体のサイズに

合わせて作られているため、天井も低く廊下も狭いのだ。

鎧を一式着込んでいるメイドにとって、歩くのも至難の業であるはずなのに、彼は難なくトーヤのあとをつけてきた。

「お客？ここに來られる人間ってことは、ロクなヤツじゃないわね！」

小さな木の椅子に座っていた少女は、すでにメイドの姿が現れているにもかかわらず、そう言い放つと視線をメイドへと送った。

「久しぶりだね」

そんな少女にも、メイドはあの爽やかで明るい笑顔を見せた。

「ほーら、ロクなヤツじゃなかった」

「はは……相変わらず手厳しいな……」

「どうやら二人は顔見知りのようだ。」

「ま、でもトーヤじゃ追い払えないか……仕方ないわね」

「ご、ごめんなさい……」

トーヤが小さくつぶやいた。

「おいおい、そんなに邪険にしなくてもいいじゃないか」

メイドは苦笑とも諦観ともとれるなんとも微妙な表情を浮かべた。

「とりあえず座って。トーヤ、お茶をお願い」

「はい」

「ありがとうございます」

二人が同時に返事をする。

「あ、一番やっすい茶っ葉でいいからね！」

「は、はい」

「やれやれ……」

トーヤは苦笑を浮かべるメイドを尻目に、台所へと移った。

あの二人が顔見知りだということが解って少しホッとしたが、考えてみればトーヤは師匠の過去をまったく知らないことに気付いた。

「ノーザンブルグかあ……」

トーヤはお湯を沸かしながら、ため息をついた。

この大陸一の王国だ。

そしてあのメイドトという人は、その聖騎士パッデインか何かだと思われる。ただ、それほど地位の高い人間が、単独で行動するだろうか？

トーヤはそう思い、森の中へと意識を飛ばした。

師匠には遠く及ばないが、トーヤも森の情報を集めるために、色々な魔法は仕掛けてある。

いつも薬草を採とりに行く場所、オオカミやクマの通り道、よく人が迷い込む場所や人が目印

にしている場所、そして自分たちの店がある村……。

すると、自分たちの葉草を売る店のある村の外に、小規模な陣じんがあるのをトーヤは見つけた。ノーザンブルグの紋章が入った旗と幕屋が展開されている。そして馬が一〇頭ほどと、暖をとる騎士達がいた。

どうやらお供はここで待機を命ぜられたらしい。

「なるほど……」

確かに師匠の住んでいる場所までたどり着くのは並大抵ではない。メデイトはここにお供を待機させて、単独で森に入ってきたのだ。別にメデイトが嘘をついているわけではないようだ。目を落とすと、すでにお湯は沸いていた。

「じゃあ、一番いいお茶っ葉を使おう」

相手はこの大陸一の王国の騎士だ。安物のお茶でおもてなしをするわけにはいかない。

トーヤはいつもよりも丁寧ていねいにお茶を入れると、しばしその香りを楽しんだ。

木の香りとキルケ独特の鼻をくすぐるような香りが混ざる。

濃さが均一になるように整えて、カップに注いで余った分はティーポットに移した。

それからお砂糖と、お湯を沸かしたときにそばに置いて、やんわりと暖あたためておいたミルク壺つぼをお盆の上に置くと、準備万端。

「あ、何かお茶ちやう請けに……」

トーヤはがさごそと棚たなをあさる。前に古いバターを処理するのに作ったショートブレッドが……などと思いながら。

「あつたー……」

本当はパンケーキくらいは焼くべきだったのかもしれないが、あんまりお茶を出すのが遅いと、それはそれで失礼だと思い、トーヤはティーカップ二つ、ティーポット、砂糖にミルク壺、そしてショートブレッドをお盆のに載せて二人がいるところへと戻った。

* * *

「は!? そんなの今のあなたになんの関係もないでしょ!!」

「関係ないとかそういう問題じゃない。いいかい、彼は弟子とはいえ男なんだぞ」

「だから何!？」

「同じ家に泊とめるにしても、だ」

「だから、別ににも起きてないって言ってるでしょ!!」

トーヤがお盆を持って居間に入ろうとすると、二人の大きな声が飛んできた。

「今まで何もなくても、これからは解らないだろ。彼だって思春期を迎えているれっきとした男なんだぞ」

「そうだとしても別にあなたが心配することじゃないと思うけど？」

「確かにそれは認める、だが、キミは昔からその辺が無頓着むとんちやくだった。無防備でもあった。だからあの時、キミはあんな男にいいように扱われて……」

「!!!」

「昔のことを蒸し返むすのは悪いとは思う、だがあの時、もっと強くキミに忠告かえしなかったことを私は今でも後悔してるんだ」

「もういい、出てって……」

「ん？」

「何しに来たかと思えば……昔話をしに来たのなら、私には話すことはない。トーヤは別にそんなよこしまな子じゃない！ 出てって」

「あ、いや、用件は別にあるんだ……」

「いいから、出てけ———!!!」

そのあと、なにやらいろいろなもの割れる音、壊れる音が立て続けに響く。

「わー、マテマテ、落ち着け！」

騎士がなんとかなだめようとするが、壊れる音は止まなかった。

「せ、先生……!!」

トーヤはお盆を台所に戻してから、居間に駆け込んだ。

「うわ……！」

木製のカップが目の前に飛んでくるが、それをすんでの所かわす。

「先生、やめてください！」

トーヤはとっさに師匠の腕を押さえようとしますが、彼女は魔法障壁に包まれているため、トーヤの手は師匠には触れられず、宙をひっかいただけだった。

「すまなかった、私の配慮はいりよが足りなかった。この場においては彼女の機嫌きげんを損ねるだけだから、今日はこれで失礼するとするよ。トーヤ君、また！」

騎士は逃げるように部屋を出て行く。そのあとを、いくつものカップだのフォークだのの食器類が飛んでいく。

「もー、片付けるボクの身にもなっってくださいよ！」

トーヤには珍しく大きな声で少女は我に返り、物を投げるのをようやく止めた。

「まったく、久しぶりに来たと思っただけ……何よ、アイツ！」

それでも気は収まらないようで、まだ手に持っていた食器を放り投げるように落とした。

「ああ、もう……！」

床に落ちたモノは全部洗い直しだなあ……などと思う。

幸い、この家には木で作ったものが多く、陶器とうきはほとんどないので割れた食器は少なかった。

「あゝあ……！」

でも銀の燭台しよくたいはいくつかが壊れてしまった。

ドワーフの職人に作ってもらった、とても価値のある燭台だったのに。

「先生、落ち着いてください」

トーヤは師匠の両手をしっかつかつかむ。この時は手をつかむことが出来た。彼女がトーヤの行為を拒んでいないからである。

このような場合、魔法障壁に関係なく、彼女に触れることが出来る。

「とにかく、騎士さんに謝あやまってきますから」

「な……！」

その言葉を聞いたとたん、魔法障壁が復活して、トーヤは数十センチ押し出された。

「そんな必要ない！」

まるで駄々だだをこねるように首を振る少女だが、トーヤは既に外に向かって走っていた。

「もう……」

一人取り残され、少女は寂さびしそうに視線を落とした。

* * *

トーヤが外に出ると相変わらず細かい雨が降っていた。

森全体が白いもやに包まれたかのように、遠くが見通せず、ぼおっとしている。

だが、その白いもやの奥にうっすらと人影が見えたので、トーヤはそこまで走った。

「メデイト様……！」

そして勇気を出して声をかけてみる。

「トーヤ君か……！」

ノーザンブルグの聖騎士は、少しバツが悪そうに視線を逸らしながらも、追ってきたことは嬉しいらしく、すぐにトーヤに向き直った。

「見苦しいところを見せてしまったね。すまない。別に君を貶めようとかそういう意図はないんだ、それだけは解って欲しい。ただ彼女は過去に一度、良くない経験をしていてね……」

メデイトは恥ずかしそうに笑うと、トーヤに謝った。

「と、とんでもありません、ぼ、ボクこそ……その……」

あの痴話喧嘩にも似たやりとりは、自分のせいだとトーヤは思った。それにノーザンブルグの騎士と自分の身分差を考えたなら、謝られるなんてとんでもない。そもそも同じ場所に立っていることさえ……恐れ多い。

トーヤは自分の知っている限りの知識をフル動員して、メデイトの前に跪いた。

「ああ、いや、そこまでするには及ばない。ここは魔女の森だ。ノーザンブルグの市中でもなければ、ましてや宮殿の中でもない。私とキミは対等だよ」

「で、でも……」

「それに、もっと自分を誇りに思いたまえ、トーヤ君」

そう言っつてメイドトはトーヤの腕をとつて、しっかりと立たせた。

「誇り？」

「そう、キミはあの大魔法使いの弟子なのだからね。彼女が弟子をとるなんて、今まで一度もなかった。それだけキミは特別な人間だよ」

「は、はあ……」

トーヤはいきなり衰はめられて、頭の中がさらに混乱してしまった。

「彼女の弟子は歴史上、キミしかないんだ」

「そ、そうなんですか」

「だからもっと、ほら、しゃきっとして！」

メイドトは何となく姿勢の定まらないトーヤの背中を叩いて、背筋を伸ばさせた。

「は、はい……」

「でも、ちょっと頼りないな」

「す、すみません……」

「そこは、まあ、彼女の教育に期待するしかないかな」

「が、がんばります」

トーヤはグッと拳を作ってみせるが、しかしその手は白く華奢きゃしゃで、いかにも頼りなさそうな拳だった。しかし、師匠の小さくて拙つたない手よりはずっと大きい。

「期待しているよ。この森に魔法使いが増えるのは、我が国にとっても喜ばしいことだ」

メデイトはそう言うのと、嬉しそうに笑った。

「そうなのですか？」

「彼女の魔法は絶大だ。それを受け継ぐ人間が現れたことは、とても頼もしいことだからね。もっとも……我が国の味方をしてくれれば……の話だが」

魔女の森、この創世の森はノーザンブルグの北側を覆い尽くしている森だ。したがってここはノーザンブルグ領でもある。もっとも魔女のおかげで、王国の支配は及んではないが……しかし便宜上、ノーザンブルグの領内であることに間違いはない。

「は、はい」

そしてトーヤ自身、どこの国の人間かと問われれば、「ノーザンブルグ」と答えるだろう。

「キミはどうして彼女の弟子になりたいと思ったんだい？ 何か、目的があったんだらう？」

「え、あ、それは……」

トーヤはいきなり直球とも言える質問を喰らって、狼狽きやうたいえた。

何故ならトーヤは「宮廷魔術師」になりたかったのだから。それも、ノーザンブルグの。

いや、チャンスではないか。

今、目の前にいるのは、ノーザンブルグの聖騎士だ。

「ん？ どうした？」

しどろもどろになって、狼狽え気味のトーヤの顔を、メデイトがのぞき込む。

「あの、宮廷…魔術師……に……その、なりたくて……」

トーヤは上目遣いで、答えた。

笑われたらどうしようとか、拒否されたらどうしようと言う気持ちに湧く。

「そうかそうか！ それは我が国のか？」

だがメデイトは目を見開いて、喜んだ。

「は、はい」

「それは頼もしい。かの大魔法使いの弟子が、我が国の魔術師になってくれるなら……とても喜ばしいことだ」

そしてトーヤを祝福した。

「あ、で、でも……」

志望はしているが、本当になれるかどうかは解らない。

自分はまだ師匠の足許あしもとにも及んでいない。

「なれるかなれないかは、今心配しても仕方がないだろう。ただキミは彼女の下もとにいる。何度言うが、それは特別なことだ。だからまずは精一杯、彼女から学ぶことが大切だと思う」

「はい」

「嬉しいよ。彼女が出て行ってから、我が国は魔術師が足りなくてね」

「あ……」

「今は比較的落ち着いているが、いつまた戦乱の世に戻るとも限らない」

メデイトは眉を歪ませると、心配そうな表情で天を見上げた。

「やっぱり先生は、ノーザンブルグの魔術師だったんですね……」

「遠い昔の話だ。彼女が何歳なのか、私も皆目見当もつかない」

「は、はあ……そうなんですか。でもその時のことを知ってるんですね」

「ははは、そうだな、私もそれくらいは長生きさせてもらっている。だが、彼女の足許にも及

ばないさ……それに」

メデイトはまた天を仰ぎ見ると、少し悲しそうな顔をした。

「私は魔法使いではないから、自分で長寿を得ることは出来ない。私は私の役目が終われば、

そこが寿命なのさ」

国に請われて、長寿を得ている。

しかしその秘術も失われつつある。彼女が、師匠が国から去ってからは……。

「わずかな希望を携えて来て見たのだが……やれやれ、逆に彼女を怒らせてしまうとは、我な

がら情けない」

「いえ、先生が感情的すぎるんだと思います。偉大な人ですけど、けっこう見た目通りのところもあって……」

見た通りとは、子供のようなどころだ。

気紛れで、気分屋で、好き嫌いが激しくて、わがまま……。

「でも、時間がたてばすぐに機嫌は直るんです。だから、また少し時間をおいて来ていただければ大丈夫だと思います」

「ははは、そうか……ありがとう、心にとめておくよ」

「あの、ところで、先生はどうして宮廷魔術師をやめたんですか？」

「気になるかい？ けれど、それは彼女にしか解らないことなんじゃないかな……」

あの日、突然、彼女は城から出て行ってしまった。

理由も告げずに。

別れの挨拶だけを済ませて。

彼女の研究室には、何も残っていなかった。

「ただ、きっかけは解らないわけじゃないんだ」

「きっかけですか？」

「ああ」

メイドは頷くと、あの頃のことを思い出した。

海を渡って攻めてくる異民族との戦いにこの国は疲弊していた。圧倒的に敵の方が強かった。有能な騎士が一人、また一人と討ち取られ、沿岸の街々は焼き払われ、略奪され……国の権威も地に落ちかかっていた。

彼女は古の魔法を解き放ち、禁忌とも言われる秘術を以て、彼らと対峙した。その時の術のせいで、彼女の身体は子供になってしまったのだと、メデイトは聞いた。

「魔法のせいだったんですね、先生が子供の姿なのは」

「呪い的一种だと聞いたことがある。それだけ使ってはならない術だったのだろう」

「呪い……」

大魔術はその効果に応じた負の面を持つことが多いと聞いたことがある。

おそらく師匠はそれを受ける覚悟で、その術を使ったのだろう。もしかしたら、もっと恐ろしく強い呪いだったかもしれない。

「それに、自国内に内通者が多くいてね。それが戦争に負け続けた原因の一つでもあった」

「そ、そうだったのですか……」

「そして彼女は内通者の男と……」

メデイトは言葉を濁しながらも、師匠が内通者の男に入れ込んでしまったことをトーヤに伝えた。魔法しか知らなかった世間知らずの彼女の心をつかみ、この国の情報を盗み出していた。ともかく様々な要因が重なって、ついに彼女は城から出て行ってしまった。いや、出て行か

ざるを得なくなつたとも言えるかもしれない。

「いかなな、彼女と話をすると、どうしても昔のことを引っ張り出してしまふ」

「先生は、ボクにもあまり過去のことは話してくれないんです」

「ハハハ、そうだろうね。彼女にとって、あまり良い過去ではなかったようだからね」

「……そうですか」

「おかげで本来の用事を伝え損なつてしまった……」

メイドは赤面しながら、頭の後ろをポリポリと搔いた。

師匠に及ばないまでも長く生きてきた騎士にしては、その仕草はトーヤには滑稽こっけいに写つた。

気さくで、明るくて、奢おごらない。

騎士というものは、もっと荘厳で、気高く、トーヤのような位を持たぬ者とは会話すらしな

いと思つていただけに、なんだか不思議だった。

「あの、言ことつてくらいなら出来ると思ひますけど……」

せつかく遠いところから足を運んで来たのだ。何も収穫がないまま帰すわけにはいかない。

「国家機密に関わることなんだ……とはいえ、私がこの森に来たことがすでに機密事項だから、

今更キミに隠し事しても意味がないか」

「あ、そういうことなら……別にいいですけど」

「いや、いいんだ。キミを魔女の弟子と信頼して、言つてを頼むよ」

メデイトは改まると、この国の安全保障に関わる状況をトーヤに話した。

「今、この国は比較的平和な時が続いている。それはもちろん我が軍によるところは大きいが、この森に魔女がいるから我が国に手を出さないという事情もある」

「ええ!？」

「それくらい、彼女は強い。本気を出させたら、何が起きるのか解らない。そう思って誰も我が国に戦争を仕掛けてこないんだ」

「先生がそんな人だったなんて……」

「生きる伝説だよ、彼女は。そんな彼女に弟子として認められたんだから、キミはもっと自信を持っていいと思うんだけどなあ」

「は、はい、がんばります」

まさか戦争とか国の平和とかそんなレベルの話が出てくるとは、トーヤは思ってもみなかった。と、同時に、師匠をとて誇らしく思った。

「そんな伝説の魔法使いに、復帰までは望んではいないが、せめて知恵だけでも貸してもらえないかと思ってるね。国王からの親書も預かっているんだが……」

「解りました、それも先生にお渡しします」

「助かるよ。もっとも、返事は望めそうにないが……」

「諦めず^{あきら}にまた来てください。たぶん、先生は機嫌さえ良ければ会ってくれますから」

トーヤはそう言って、メデイトに笑顔を手向けた。

「ああ、そうするよ」

メデイトは少し照れ気味に微笑みながらも、トーヤの右手をしっかりと握った。

* * *

「ねえ、先生？」

夕食時。

トーヤはスープを食べる手を止めて、目の前の少女の顔を見つめた。

自分よりも小さくて、目の前のスープを飲むのにも一生懸命な、この小さな少女を。

「ん、どうしたの？」

少女もスプーンを持つ手を止めて、トーヤを見上げる。

「ちゃんと国王陛下の親書、読みましたか？」

「う……」

トーヤのその真剣な眼差しまなざに耐えられなくなって、少女は視線をそらした。

「わざわざノーザンブルグの聖騎士様を持って来てくださったんですから」

「あー、やめてやめて、その言い方。なに？ 聖騎士だから偉いの？ 国王だからいうことを聞

かなくちゃいけないの？」

「少なくとも、この国にいる以上、偉いと思います。言うことも聞かないと……だってそうじゃないと国が成り立たないですし」

「そんなの、この森では関係ないわよ。地位も名誉もこの森ではすべてが平等なんだから」

「先生がいるからですよね。騎士様も言っていました。ここは魔女の森だからって。だから騎士様はボクと対等に接してくださいました」

「あら、メイドも解ってるじゃない」

「正直、先生ってほんとにすごいんだなって思いました」

「うんうん」

「でもそうやって騎士様も国王も、この森の掟を守っています。今度は先生がこの国の掟に……は従わなくてもいいのかもしれませんが、せめて親書は読んで、お返事を返さない」と

「そんなの……」

解っている。

この森が魔女の森だとしても、場所はノーザンブルグ国内にあるのだから、そこに住むこの魔法使いにも国王の命に従う義務がある。

それに本当にこの国に危機が訪れたら、さすがに黙っているわけにはいかないのだろうという漠然とした思いもある。

「ま、まあ、大人げなかったのは認めるわ。トーヤの言うことが正しい」

少女は観念すると、素直にトーヤの言葉を受け入れた。

「解ったわ、ちゃんと返事は書くわ。でも、今はイヤ！」

「はい、その気持ちは察します。すぐじゃなくても、大丈夫だと思いますよ」
なんだかいつもと逆の立場。

でもそのトーヤの優しい笑顔と声が、何故か少女の心を落ち着かせてくれた。

「でも、びっくりしちゃったー」

トーヤがニコニコしながら、目の前の少女を見つめる。

「何？」

「先生が宮廷魔術師だったなんて」

そしてこの一国の運命を左右するほどの魔法使いだったなんて。いや、それはメイドトの言葉を信じるなら、過去の話ではなく、現在も！

「メイドトから聞いたのね。あんにゃろー、私の過去なんてどうでもいいのに」

少女はやれやれといった表情をすると、ため息をついた。

「うん、いろいろ教えてくれました。さすが先生だなーって思っちゃった。でもどうしてやめてしまったんですか？」

「どうして辞めたかなんて、一言で説明できるもんじゃないわよ」

少女はそう言うのと、悪戯っぽく笑った。

「そうなんですか……」

「他にやりたいこともあったし、仕事はつまらなかったし、人間関係は面倒だし、束縛も多いし、料理は不味いし……」

少女は指を折りながら、自分が宮廷魔術師をやめた理由を挙げていく。

が、途中で言葉は途切れた。

いろいろ嫌なことを思い出したからである。

そしてそれをトーヤに話すのに、嫌気が差したからである。

「他には？」

しかしトーヤは言葉の続きを求めてくる。

「んー……何よ、それ以上の理由が必要なの？」

「ボクには納得できないなあ……」

「他の理由なんてあったとしても、くだらなくて、うんざりするようなことだから、別にトーヤが知る必要もないわよ」

少女はそう言うのと、今度はサラダに手をつける。

「ボクだったらそれくらいじゃ辞めなと思うなあ……」

宮廷魔術師としての立場や特権の方が、師匠が揚げた理由よりも魅力的に思えるからだ。

「んー、そうかしら？」

人間関係が面倒くさいというのは、少女にとってはかなり大きな理由だった。もともと束縛そくばくされるのは嫌いだし、自分の性に合わないルールを課せられるのも嫌いだった。

さらに派閥や政争、貴族達のががまま、民衆の一貫いっかんしない気紛きまぐれな心、そして魔術への無理解、利権と欲望。

挙げ句あの果てはに命まで狙ねらわれたり、誘拐されそうになったり。

「ほんっと、つまらないところよ」

それに較くらべて、この森のなんと静かで、自由なことか。

「全然話が見えないんですけど」

「要するに、トーヤにはまだ早いつてこと！」

説明するのがめんどくさくなつた少女は、いつもの逃げ口上で会話を終わらせた。

「またそれですか……」

そう言われてしまうと、未熟なトーヤは反論ができない。

と言うか、反論したとしても、トーヤにはまだ早いという言葉ですべてが片付けられてしま
うのだ。

「大丈夫よ、トーヤなら宮廷魔術師になるなんて、楽勝だから」

「そ、そうかなあ……」

「私の元で勉強すれば、それくらいは保証するわ」

「は、はい！」

「そして身を以て経験するといいわ。人間の世界を」

「人間の……せかい？」

「そう。私がやめた理由が、解るから」

「は、はあ……そういうもんでしょうか？」

「解らなかつたら、トーヤは宮廷魔術師に向いてるってことになるわ」

「ええ!？」

「だってそうでしょ？理由が解らないということは、宮廷魔術師を辞めたいとは思わないうてことになるんだから」

「な、なるほど……」

「ウフフ……もっとも虫も怖がっているようじゃ……」

「あう……」

トーヤは少女に輪をかけて平和主義者である。

虫一匹殺すのだって、大騒ぎだ。

そんなトーヤが、宮廷魔術師なんか勤まるつとワケがない。

少なくとも、今のままでは。

けれど人は成長するし、環境にも慣れていく。宮廷での常識にどっぷりとつかれば、トーヤの価値観も変わってしまうかもしれない。

それならそれでよい。

ノーザンブルグという国が魔術師を必要としていることは確かだからだ。

自分はそれに協力は出来ないが、自分の弟子がそこに行くことは悪くはないだろう。

「じゃ、じゃあ、もう一つ質問！」

「ん？ まだあるの？」

「メデイトさんとは付き合ってたんですか？」

「ぶー！」

「なんか、メデイトさんは先生に気があるように見えました」

「その話も、トーヤには早い！」

「えー!？」

「だいたい、そんなこと知っても、トーヤには関係ないことでしょ」

「いやあ、先生も誰かを好きになることってあるのかなって思っ……」

「……………」

「どうだろう。」

今ではこんなに小さな少女になってしまったが、かつてはちゃんとした大人だった。もっと

も美人であったかどうかは、自分でも自信はないが。

人を好きになったことは……たぶんある。

一人の騎士にのめり込んでいた。

聡明そうめいで、大胆で、かっこよくて、自己中心的なところはあられるけれど、他人を引っ張っていく頼れる人だった。

そんな彼に盲目的に従ってしまった。

今思えば、彼のが好きだったのだろう。

しかし当時はそんな自分の想いおもに気付いてはいなかった。

そして彼に裏切られ、捨てられた。自分だけじゃない、彼は騎士でありながら、国をも捨て去った。当たり前である。彼は敵国の人間だったのだから。

彼が国から消えたときの喪失感と絶望感。そして自分が彼に尽くしてきたこと……。

そこで少女は思い出すのをやめた。これ以上は思い出したくないし、もう過ぎたことだ。

「トーヤ！」

少女はびしっと人差し指をトーヤに向けると、厳しい口調でトーヤの名を呼んだ。

「は、はい!？」

「今夜は私と一緒に寝なさい！」

「な、なんですか突然……」

「いいから！」

メイドトに年頃の男と一つ屋根の下で寝るなど危険だと言われたことを、少女はまだ根に持っていた。トーヤがどんなに安全な男の子であるかを証明するには、トーヤと一緒に同じベッドで寝ることであると思いついたのだ。

「でも最近では先生の方が寝る時間早いじゃないですか。ボク、先生からの宿題もやらないとけないし、読みたい本もあるから……あいた！」

少女は問答無用にトーヤにデコピンする。

「そんなの明日でもいいから！ あ、いや、違うな……」

「？」

「明日も一緒にねるのよ！」

「えー!?」

「明後日あさっても!!」

「ええー!?!」

「うるさい！」

もう一度少女のデコピンが飛ぶ。

「あいた！ もー、なんなんですか、突然すぎますよ、先生」

「これは……そう！ トーヤへの特別な試験よ!!」

今考えついたテキトリーなことを言う。

「試験！そ、そうですね、そういうことなら……」

試験と言われて、トーヤは改まって、真剣な表情になった。

「そうそう、物わかりが良くていい子ね、トーヤは」

「でも、何のための試験なんですか？」

「え？」

ハテ、何のための試験だろうか……？

トーヤが安全な男の子かどうかの試験……と言っても、何のことやらだろう。

「平常心。トーヤの平常心を測ります」

少女はまたまたテキトリーな理由を思いついたので、そういうことにする。

「は、はあ……」

寝ていると平常心が解るのかなあ、やっぱり先生は凄いなあ……などと呑気なことを考える
トーヤもトーヤでおめでたい脳みそである。

「と言うわけで、今日からしばらくは一緒にねるのよ」

「わかりました、がんばります」

トーヤは真剣な顔で深く頷いた。

* * *

夜の学びの時を過ごし、身を清めて、トーヤは師匠の寝室の扉を叩いた。

「失礼します……」

普段は掃除の時にしか入らないので、ちょっと緊張する。

こんな時間に師匠の寝室にお邪魔するのは、夜勉強していても解らないことがあつて質問しに来たときくらいだ。

「あ……」

そして、ベッドが大きくなっていることに気付いた。

師匠の身長は一三〇センチ程度しかないのに、ベッドもそれに合わせたシングルだった。そのため、トーヤと一緒に寝るのは不可能だったのである。だが部屋に入ってみると、ちゃんとベッドが大きくなっており、枕も二つ用意されていた。

また天蓋てんがいも外されている。

「わざわざベッドも用意したんですね……」

トーヤは少し呆れて、そして少しドキドキした。

「そりゃいつものベッドじゃトーヤは寝られないでしょ？」

「それはそうですけど」

別に床でも良かったのに、ともトーヤは思った。

でもそれを口に出すと何か言われそうだったので、声には出さなかった。

「それで、先生？」

「なに？」

「合格の基準を教えてください。じゃないと、どう試験に臨んでいいのか……」

「え？」

そういえば、試験と言うからには合格／不合格の線引きが必要であった。

「まさか先生、考えてないんじゃない……」

「ちや、ちやーんと考えてるわよ。今回はトーヤの平常心を試験するんだから……」

とか言いながら師匠はあれこれと考えて、試験の内容を決めた。

「私が寝ている間に私に触らないように過ごせるかをテストするの」

トーヤが平常心を保てれば、自分を襲ってくるようなことはない。襲うには自分に触れる必要がある、と考えたようだ。

「は、はあ。でも一緒のベッドだと身体は触れてしまうとは思いますが……」

「そういうのは別にいいの。能動的に手で触ってきたり、身体をすり寄せたりするのがNGってこと」

「別にそんなことしませんよ」

トーヤの素っ気ない答えに、何故か少女はカチンときた。

「あいた！」

そして自然とデコピンが出る。

「もー、なんなんですか……」

トーヤが額を抑えて、泣きそうな表情になる。

「いいから黙って最後まで聞きなさい」

「はい」

「何かの間違いで触ってしまうこともあると思うので……」

「いや、ないですよ」

「口答えするな！」

「あいた!!」

「質問は最後に受け付けます」

「はい……」

「胸なら三回まで、お腹や脇などの体は五回まで、太ももや足は三回まで間違いで触れてもセ

ーフとする」

「は、はあ……」

「なんのこっちゃ？」

トーヤは首をかしげるしかなかった。

「もしそれよりも多く触れるようなことがあったら、すぐに破門よ！」

「それは……大丈夫だと思います」

破門と言われて、一瞬ドキリとしたが、別に自分から師匠の身体に触る気もない。

「ずいぶんすんなりと受け入れるわね」

「先生にそんなことするなんて恐れ多くて出来ませんし、そもそも寝てたらそういうことも出来ないと思います」

「寝ぼけて触ることくらいはあるかもしれないじゃない」

「先生の方を向かなければ大丈夫だと思いますよ。あ、でも寝相が悪かったらゴメンナサイ」

「んー、この間に一緒に寝たとき、特にトーヤの寝相が悪かったってことはなかったから、それはないと思うけど……」

村にある店でトーヤと同じベッドに泊まったときのことを、彼女は思い出した。

「それはよかったです」

トーヤもホッとして、にっこりと笑った。

「さて、それじゃあ寝ましょうか」

少女がわりと元氣よくベッドに潜り込む。

「あ、ボクはまだやらなくちゃいけないことがあるので、先生は先に休んでてください。課題

がもう少しで終わりそうなんです。あとこっちの植物学の本も読み進めておかないと……」
とトーヤが言葉が続けようとしたところで、トーヤの顔面に少女の跳とび蹴げりが炸裂さくれつしていた。
「くくく……！ もー、なんなんですかー！」

蹴られたところをさすりながら、トーヤは起き上がる。

周囲にはトーヤが持って来た本だのノートだのが無残にも散らばっていた。

「そんなの、明日からでも出来るでしょ！」

「それはそうですね……」

少しでも多くのことを学んで、少しでも早く宮廷魔術師になりたいのに。

「今は、ちゃんと試験に集中しなさい！」

が、師匠の言うことももっともである。これから試験なのだ。他のことを勉強する余裕はないはず……がだ、そもそもこの急に始まった試験が、果たして魔術の役に立つのかどうか……
トーヤは懐疑かいぎ的てきだった。

「うーん、解りました。胸になら三回、体は五回、足は三回ですね？」

トーヤが念を押す。

「そ、そうよ」

「たとえば、ですよ、先生？」

「なによ？」

「先生の身体を一回触って、そのまま手を離さずにずーっと触り続けたら、それは一回でいいんですか？」

「はっ」

しまったと、少女はルールの欠点に気付く。

エロいことをするのに、何もイチイチ手を離す必要は無いのだ。一度触れてしまえばそのあとずっと触り続けてしまえば回数の上限など関係ない。

いやいや、トーヤに限ってそんなことをしてくるわけは……。

え、でもそういう質問をしてくるってことは……まさか、私の事を!?

少女はパニックって、トーヤに言葉を返すことが出来なくなってしまった。

「今ふと思ったんです。偉大な先生と一緒に寝られるなら、先生にずっと触れていたいなって。なんか、魔力がもらえそうな気がして」

しかしトーヤの動機は少女の心配とはまったく関係なかった。

「え……」

ちよっと恥ずかしそうにうつむくトーヤに、少女はなんとも言えない複雑な気持ちを抱いた。

自分を偉大な魔法使いとして尊敬し慕ってくれる嬉しさと、一緒に寝ると言っているのに、異性として認めてはもらえてなさそうだというガツカリ感と、まーでもなんだかんだでトーヤは可愛いというよく解らない気持ちと……。

「えーと、三〇秒まで！三〇秒までを一回とする。それを過ぎたら二回目とみなすわ」

あー、しまった、三分って言えば良かったー……などと後悔しながら、少女は新しいルールをトーヤに説明した。

「はい」

トーヤは素直にうなづく。

「それじゃあ、お休みなさい、先生」

師匠の隣に横になる。

なんだか照れくさいし、恐れ多くてドキドキもする。

でも、大魔法使いと一緒に寝られるのは、世界広しといえど、自分だけであることも確かだ。メデイトが言っていたように、もっと自信を持たなくては。そのためにはもっと魔法を学んで、自分も偉大な魔法使いにならなければとトーヤは心に誓う。

だからこの試験にもパスしないと……などと思っていると、いつの間にかトーヤの腕に、少女がしっかりと捕まっていた。その仕草は実に子供っぽい。

「……………」

トーヤは「これも触ってるうちに入りますか？」とか「もう三〇秒たっちゃったんですけど」とか言おうとしたが、やめた。

自分からは触っていないし、なによりも少女の表情がとても幸せそうに見えたからである。

一方の少女は、かつての宮廷でのことを思い出していた。

あの聡明で、大胆で、かっこよかった騎士のことを。

今までは彼のことを思い出すだけで、彼を憎む気持ちと、そして吊う気持ちと、自分への恥ずかしさでいっぱいになっていた。なぜなら、敵国へと去った彼は、然少女と対峙し、そして……少女の魔法の餌食となったのだから。

彼女の呪文に巻き込まれ、跡形もなく消し飛んでしまった。

せめて苦しまずに死んだことを少女は願った。

「……………」

ここまで思い出したのは、何年ぶりのことだろう。

もう思い出したくない過去なのに……今は不思議と最後まで思い出すことができた。

冷静に、当時のことを分析できる。

思い出してみれば、彼は額や頬にキスをしてくれることはあったが、それ以上のことは何もして来なかった、してくれなかった。

彼なりに、危険を察知していたのだろう。

ノーザンブルグーの、いやおそらく世界一の魔術師と肉体的に結ばれることがどういうことか……彼なりに恐れていたのだろう。

永遠のチャームや、別れたときのための呪いなど、愛憎に関する術はいろいろある。国を裏

切ることを決めていた彼が、それらを警戒しないほうがおかしい。

そう、自分は最初から、彼には信頼されていなかった、愛されていなかった。何度も愛していると言われたが、愛されていない兆候は最初からあったのだ。それに気づけなかった。

そして彼はこの国を去り、自分もまた、宮廷から去った。

あれから、ずっと一人であった。

一人でいることが、自分に一番似合っていた。

それは今でも、そう。

弟子をとるなんて、考えられない。

けれど……。

いまは、これが心地よい。

少女は、素直にそう思った。

あの騎士に較べたら、トーヤの腕は細くて、華奢で、頼りない。

けれど、いまは、これが心地よい。

でもどうして心地よいのか……それは、世界中から恐れられるこの魔女にも、よくわからなかった。

「先生、先生？ まだ起きてますか？」

不意に、トーヤの声が聞こえてきた。

「起きてるわよ」

目を閉じたまま、少女は答える。

「あの、もうちょっと右に寄れませんか？」

「ヤダ」

今動いたら、せっかくの心地よさが終わってしまいそう。

「は、はい、わかりました……」

一方のトーヤは、師匠がほぼベッドのど真ん中を占有しているため、ベッドの端に追いやられてしまい、変な体勢になってしまっていた。落ちないように踏ん張っているのに、腰と背骨に変な圧が……。

ブルブルと震えるトーヤ。

「ぐぐぐ……」

最初から少女がど真ん中を占有することが解っていれば、横向きに寝るとかいろいろ対策をとれたのだが、ベッドに入ったらすぐにこの体勢になってしまったため、修正ができない。

「先生、ごめんなさい！」

「え!？」

トーヤはいきなりがばっと起き上がると、少女を抱きかかえた。

少女は驚いて、一瞬、魔法障壁を復活しかけたが……。

トーヤは三秒もしないうちに少女をちょっとだけ右に寄せて、ベッドに下ろした。

「はあはあはあ……」

よっぽど体勢がつかかったのか、トーヤは腰を押さえながら肩で息をしていた。

「どうしたの？」

「ごめんなさい、ちょっとベッドから落ちそうで……どうしても耐えられなくて、先生に触れてしまいました」

トーヤは息を荒げながら、少女に謝る。

なーんだ、と少女は心の中で少しがっかりした。

自分を襲う気になったかと思ったのだ。もっともそうなら、彼女の魔法障壁が復活して、トーヤをベッドの外へとはじき飛ばしていただろうが……。

あの右に寄って欲しいという訴えは、トーヤにとってそれなりに厳しい状況だったようだ。

「じゃ、今のはノーカウントでいいわ」

どかなかった自分にも責はある。

もっとも、その状況を打破できる魔法はいろいろあるとは思いますが……とも彼女は思った。

「ありがとうございます」

トーヤは嬉しそうだ。

さて、仕切り直し。

ちょっと乱れたシーツを直す。

「先にトーヤが寝なさい。あなたの方が身体が大きいから、まず楽な姿勢をとって」

と言ってから、後悔する。そんなことを言っても、結局トーヤは少女のために半分以上のスペースをあけてしまうからだ。

「はい、これで大丈夫です」

案の定、ベッドに横になったトーヤは、少女のために最大限のスペースを用意する。

「本当にそれでいいの？ また苦しくなって私に触っても、今度は許さないわよ？」

「うう……」

オロオロするトーヤ。

ベッドをもっと広くするという解決策を少女は思いついたが、それは心の中で断固拒否した。

あまり広いとトーヤのそばにいられないから。

「もっと普通にしていいいわよ？」

「はい……」

トーヤはいつも自分のベッドで寝るときのように、仰向けになった。

そしてその隣に少女が横になる。



「もうちょっとこっちに来なさいよ！」

少女はぐいっとトーヤの腕をひっぱる。

「わ、わ……！」

「これは、私から触ってるんだから、大丈夫よ」

「は、はい」

ピッタリと少女の身体とくっつく。

ほんのりと香る、少女のミルクのような甘い匂い。

自分よりも高い体温。

「ほら、魔力を充填してあげる」

そう言って、少女はぎゅーっとトーヤに抱きついた。

かと言って、別に魔力がトーヤにみなぎるわけでもない。

ただ、少女の体温と、自分よりも早い心臓の鼓動が伝わってくる。

やがて、トーヤを抱きしめている力が徐々に抜けはじめ……可愛らしい寝息が聞こえてきた。

そういうえば、顔や頭は特に触ってもいい回数は決められてなかったなあとトーヤは思いつく。

「おやすみなさい……」

トーヤはそっと、柔らかい少女の髪に口づけをした。

本当は、頭を撫でたかったのだが、少女がピッタリとくっついているので、腕が動かせなか

ったのだ。

こんな状態で、果たして平常心なんか測れるんだらうか……などと思いつつ。
トーヤも少女につられて、ゆっくりと目を閉じた。